

19世紀末における中国人の手による漢訳イソップ ——『読書楽』を中心に

陳 旭

『読書楽』は1898年に鍾天緯によって上海美華書館から出版された上海三等学堂の教科書である。白話で編纂されたこの本は『字義』、『歌謡』、『喩言』、『故事』、『智慧』、『格言』、『女鑑』、『経余』、『格致』、『史略』、『文粹』、『詞章』という十二冊で構成されている。難解で味気ない伝統的な古い教科書とは違い、楽しく読むことができるため、『読書楽』と名づけた。また、この本を読むと、「蓋蒙之義訓為蒙昧、得鏡照之、蒙者斯明」となり、「蒙学鏡」とも呼ばれる。

『読書楽』の第2巻は『喩言』であり、中には93編の寓話が収録されているが、その多くは漢訳イソップ寓話である。本稿では、『読書楽』における漢訳イソップ物語を対象とし、内容、言語などの面から考察するとともに、中国人の手による漢訳イソップ物語の特徴と影響を分析する。

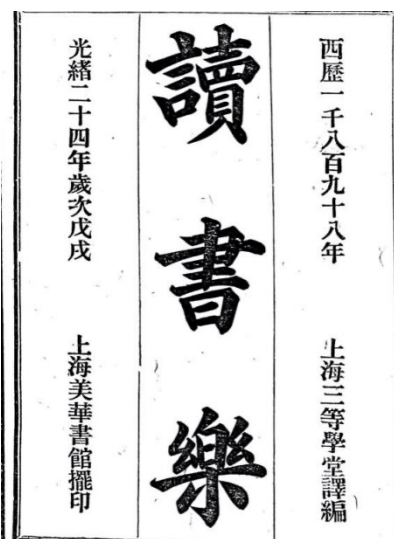


図 1 『読書楽』の表紙

(一) 鍾天緯と上海三等學堂

『読書楽』は、鍾天緯が編纂したものであり、上海三等学堂の教科書でもある。そのため、内容を触れる前にまず鍾天緯と上海三等学堂を紹介しておく。

19世紀末に起こった維新変法運動は、政治や経済などの面に大きな影響を与えたのみならず、文化と教育ノ面にも巨大な影響を及ぼした。維新変法運動では「科挙制度を廃止すること」、「学校を興すこと」、「民智を開くこと」、「人材を育成すること」などを提唱しながら、西洋知識を学び、新式な教育を展開することを主張した。このような時代を背景に、教育者達が新しい学堂を開いた。鍾天緯もその一人である。

鍾天緯は江蘇省松江の(現在の上海)出身で、戦乱に乗じて、転々と流離の少年期を過ごした。彼は勉学を放棄せず、独学に励んだ。しかし、一般の儒者とは違って、科挙を重んじず、当世の時務に熱心で、西洋学を積極的に探求した。1872年、友人の紹介で上海方言館に入り、アメリカ人宣教師の林樂知に師事した。1878年にドイツに派遣された李丹崖公使に同行し、1881年に

帰国するまで、西洋の政治文化の観察と探索を行った。帰国後は、上海を中心に翻訳、教育関連の活動を行っている。1882年、江南製造局翻訳館に招聘され、傅蘭雅達と『西国近事類編』、『工程富富』、『英米水師表』、『鑄錢説略』、『考工紀要』など西洋の科学技術を主に紹介した書籍を翻訳した。

1893年から鍾天緯は新式教育事業に従事し始めた。1895年、経元善をはじめ、慈善事業に熱心する人達と共同で「同仁公済堂」を設立した。鍾天緯は駐堂董事（責任者）に推挙された。同仁公済堂は、震災の救済、薬の配布、義塚、義塾など多方面での公益活動を目指しているが、責任者である鍾天緯は義塾の創設にしか興味を持っていない。「医療は趙君に、義塚は曹君に、薬は劉君に任せておく」と彼は善堂の各事務を分業して、自分は義塾だけを管理していた。鍾天緯にとって、「義塾」の意義は単に善事ではなく、維新運動の続きである。しかし、他のメンバーにとっては、災害への薬の提供などの善行は教育よりも即効性のあるものであったため、鍾天緯の行為については、「正業に就かない」という言葉がささやかれていた。結局、鍾天緯は駐堂董事の職を辞し、同仁公済堂との関係を離脱し、別の学堂の創立を目指していた。

学校の創立は場所と資金不足という二重の困難に直面していた。この時、元善により設立された経正書院は停校となり、1896年8月に鍾天緯が盛宣懐を名乗り、ここに小学堂を設けてもらった。鍾天緯と盛宣懐は旧知であり、盛宣懐は既に鍾天緯の『学堂宜用新法教授議』など各種の章程を見ており、盛は鍾天緯の考え方に賛同しているのであった。このため、盛宣懐は鍾天緯に大きな支持を与え、学堂を「三等公学堂」と定め、南洋公学堂と北洋公学堂という第一、二等の学堂とつながった。ゆえに、1896年9月、盛宣懐の支援を受け、上海三等公学を設立した。

三等公学堂では蒙館と経館に分かれ、聡俊の子弟を選抜してクラスを分けて学習した。蒙館は8歳から10歳の子弟を募集し、3年間学習し、識字明義を主とし、3000字を熟知しなければならない。経館は蒙館の学生及び別館優秀学生から募集し、年齢は十一から十三歳、学制も三年である。経館は経典、歴史などのほかに英語を学ばなければならない。優秀な卒業生は南洋学堂と北洋学堂を送ることができる。



図2 鍾天緯像



図3 三等公学堂の正門

教科書に関しては、三等公学堂は『三字経』、『千字文』などの伝統的な教科書を使わなかったが、当時新式の教科書が少なく、入手も難しかったため、鍾天緯は自ら新しい教科書を作った。鍾は以前宣教師が編集したテキストの特徴を参考し、児童にもわかりやすくように、白話で『字義』、『歌謡』、『諭言』、『故事』、『智慧』、『格言』、『女鑑』、『経余』、『格致』、『史略』、『文粹』、『詞章』という 12 冊の本を編集した。内容は初心者に適し、楽しく読むことができるため、『読書楽』と名づけた。また、この本を読むと、「蓋蒙之義訓為蒙昧、得鏡照之、蒙者斯明」となり、「蒙学鏡」とも呼ばれる。

教科書だけでなく、授業方法も変わった。鍾天緯は『読書楽』の序文の中で、「中土不講教法者逾二千年、故幼學晦兒人才鮮也」と述べている。つまり、伝統的な塾の先生の多くは宿儒であり、幼い時から儒学を学んで白首に至り、祖師の教え方を守った。毎日学生に文章を 1 編を読み上げただけで、十余年ならば、相変わらず文章の意味が知らない人は多かった。なお、四、五年の勉強を経ても、意味が理解できる文字は百字にもならず、読める字も千字にもならない人も多いと鍾天緯は思った。

そのため、彼は当時の教育における重点は新しい教授法を提唱することにあつたと考えていた。例えば、教科書の内容は児童の日常用語から始め、勉強しやすく、心に刻めることを提唱した。識字は同様に話し言葉を用いて、「奔走、走也」、「朝、早也。」、「夕、遅也。」のような形で四書五経を解釈している。字を書く際には、まず先に筆画を学び、それから筆画を用いて漢字を組み立て練習する形になっている。作文も一字を抜けずに原文を書き上げるのではなく、話し言葉で文章を少しずつ展開していく形になっている。鍾天緯の教授方の特徴と言えば、実用性を求めたものである。以下は当時三等公学堂のスケジュールである。

表 1 三等公学堂の蒙館のスケジュール

| 蒙館課程表 | | | | | | | |
|-------|-----------------------------|---------------------------|-------------------|-----------------|-------------|----------------------|-------------------------|
| | 識字 | 讀書 | 講書 | 寫字 | 算法 | 體操 | 唱歌 |
| 第一年 | 每日識方字至多以二十字為限，隨講字義，共識三千字為度。 | 選學堂日記二十四孝二十四悌感應篇陰騭文圖說為底本。 | 即講以上三百課，令學生逐課選講。 | 寫潤紅格，仍用識過方字為模範。 | 學加減乘除筆算，心算。 | 每晚放學，園中散步，以暢天機，以舒筋骨。 | 宜取各種淺近之歌教以謳唱，以淪其性靈，舒其志氣 |
| 第二年 | 仍混舊方字三千個逐字講音義一齊說出仍添新字。 | 選家語及子史中文理淺近者編成三百課讀之。 | 即講以上三百課並溫上年講過三百課。 | 寫映格仍用識過方字為模範。 | 學開方。 | 同上 | 同上 |

| | | | | | | | |
|--|---------------------|-----------------------------|---------------------|---------------|------|----|----|
| 第三年 | 仍溫舊方字三千個，字音與字義一齊說出。 | 選國策國語，史記，漢書等文理稍深篇幅稍長者三百篇讀之。 | 即講以上三百課兼溫前二年所講之六百課。 | 寫脫格仍用識過方字為模範。 | 學立方。 | 同上 | 同上 |
| 以上三年，只講小學字義，立蒙養之功，如八歲入塾，期滿後，不過十齡耳。再撥入經館，授以經學史學兼英文算學。 | | | | | | | |

表 2 三等公学堂の經館のスケジュール

| 經館課程表 | | | | | | | |
|---|-----------------|----------------|--------------|----------------------|--------|----------------------|-------------------------|
| | 英文 | 華文 | 講書 | 作文 | 演算法 | 體操 | 唱歌 |
| 第四年 | 識英文方字，講拼法字義。 | 讀四字書，逐課講解。仍令還講 | 即講四字書兼及史學。 | 初學操觚，先做句字漸寫尺牘。 | 學平面量地法 | 每晚放學，園中散步，以暢天機，以舒筋骨。 | 宜取各種淺近之歌教以謳唱，以淪其性靈，舒其志氣 |
| 第五年 | 仍識英文方字，將文法初階。 | 讀五經，逐課講解，仍令還講。 | 即講經義兼即漢學 | 漸作小篇論說，由數十字擴充至一、二百字。 | 代數 | 同上 | 同上 |
| 第六年 | 講解英文文法，讀各種英文讀本。 | 讀三傳及國語、國策、史、漢 | 即講古文作法及性理諸書。 | 學作史論策論 | 形學 | 同上 | 同上 |
| 以上三年，英文已窺門徑，華文亦已通順，期滿後不過十三齡耳。或送入南北洋大學堂肄業，或徑送出洋肄習專門之學。 | | | | | | | |

スケジュールから分かるように、授業は識字からはじめ、2千余りの文字を積み重ねてから文章を教える。1つの文章を説明した後で学生に復唱させる。1人が復唱すれば10人以上が復習でき、2回復唱すれば1人が40回復習することができる。また、文章の難しさも年々大きくなり、どんどん新しい字が付け加えられている。毎年300課を教え、3年で900課を蓄積する。学習のほかに、スポーツや芸術などの科目がある。鍾天緯の新式教育は、当時としては革新的で独創的であったといえる。

(二) 『読書楽』の編集について

鍾天緯が上海三等公学を創立したのは1896年9月であるが、『読書楽』を出版したのは1898

年であった。2年足らずの間に、鍾天緯は如何なる12冊の『読書楽』を編纂したのだろうか。『読書楽』の編纂について、筆者は以下2つの問題について検討したい。

①漢訳イソップを教科書に入れた理由

まず、漢訳イソップを教科書に入れた理由はなんだろうか。

この問題に関しては、ほぼ同時期に刊行された『蒙学报』に収録されたイソップ寓話を参考にしてみよう。蒙学报は1897年に上海で創刊された清末の児童啓蒙読み物であり、児童の教科書でもある。それに対し、『読書楽』は1898年に上海で出版された小学校の教科書である。両者の出版地や刊行時期および用途がよく似ている。つまり、当時の上海の知識人たちは、既に漢訳イソップ物語の童蒙教育への適用性を認識し、次第にその内容に取り入れていったことが分かる。一方、漢訳イソップ寓話はその分かりやすい内容と洗練された用語及び人に善を勧める訓言でよく知られているのだが、これらの特徴は児童教育にぴったり合っているのである。

②『読書楽』におけるイソップ寓話の出典について

鍾天緯の生涯から分かるように、彼は上海方言館に入学し、宣教師の林楽知に従って多くの教育知識を学んだことがある。しかも、『読書楽』の編纂は宣教師が編集した英語の教科書を参考になったことが見られる。一方、宣教師である林楽知は1868年に『万国公報』を創刊したが、その中にはイソップ物語が80話も含まれていた。もしかしたら、鍾天緯が林楽知に学んでいた時に、あるいは『万国公報』におけるイソップ寓話を読んで、その後の教科書編纂の時に使っていたのではないかという仮説がある。

この仮説に関しては、筆者の調べた結果、『万国公報』に掲載されているイソップ寓話は『意拾喻言』の内容とほぼ一致し、通し番号も同じである。また、『意拾喻言』における82話の物語に比べると、『万国公報』は最後の第80話の「老蟹訓子」と第81話の「真神見像」だけが収録されていない。それに対し、『読書楽』が収録されていない寓話は第80話の「老蟹訓子」と第81話の「真神見像」のではなく、第47話の「蛤求北帝」、第60話の「驢不自量」。すなわち、『万国公報』のない第80話と第81話の物語が『読書楽』にはある。こうから見れば、『読書楽』の底本は『万国公報』ではなく、『意拾喻言』そのものを参考しているのだろう。

全体的に見れば、『意拾喻言』は82話の漢訳イソップ物語が収録されているが、『読書楽』に収録されている93編の寓話のうち80話が『意拾喻言』と一致している。これは両者の間に密接な関連があることを示している。具体的には、『意拾喻言』は中国化された独特な冒頭で始まり、さらに「俗云」という始まりの訓言で終わる形式である。このような特徴は、『読書楽』のイソップ寓話に現れているとはは偶然とは言いがたく、『意拾喻言』を参考になった証拠である。つまり、もし鍾天緯が英語の原文から翻訳したり、別のバージョンのイソップ寓話を翻訳したりしたのであれば、その訳語に『意拾喻言』のような人為的な中国化の要素が含まれているわけではない。第二に、言語、内容、形式などの観点から見ても、両者は極めて一致しており、『読

『書楽』のイソップ寓話は、直接的か間接的に『意拾喩言』を参考になったことが明らかなことである。

具体的には、『意拾喩言』は「盤古初」、「禹疎九河時」、「無稽山下」など中国化された冒頭が付け加えられているが、『読書楽』では編者が意図的にそれを削除したようである。『意拾喩言』には、このような中国風の始まりが14編あり、そのうちの10編がそれを削除されている。しかし第二十七課の冒頭における「山海経」、第四十四課のの冒頭における「峨眉山」、第六十五課のの冒頭における「羅浮山下」、第八十二課のの冒頭における「靈台山」という4編は欠落したようで削除されなかった。これはまさに『読書楽』が『意拾喩言』を参考にした有力な証拠である。

(三) 『読書楽』における漢訳イソップ

三等公学堂の成立が1896年9月であったが、『読書楽』が出版されたのは1898年であった。1年余りで12巻の教科書を編集させたことから分かるように、鍾天緯は新式教育について独自の見解を持っていたはずである。本稿では、『読書楽』に収録されている漢訳イソップ寓話について考察するとともに、『意拾喩言』との比較研究を通じ、その関連を明らかにしたい。

まず『読書楽』の漢訳イソップ寓話目録を以下のように整理した。

表3 『読書楽』と『意拾喩言』の目次に関する比較表

| 『読書楽』 | 『意拾喩言』 |
|-----------|-----------|
| 第一課 兩雞相鬪 | 17. 雞鬪 |
| 第二課 雞得珍珠 | 2. 雞公珍珠 |
| 第三課 野猪預備 | 73. 野猪自護 |
| 第四課 狐罵葡萄 | 19. 狐指罵蒲提 |
| 第五課 雞鵠同飼 | 65. 雞鵠同飼 |
| 第六課 牧童説謊 | 75. 牧童説謊 |
| 第七課 人獅爭大 | 76. 人獅議理 |
| 第八課 鰍鱸俱亡 | 79. 鰍鱸皆亡 |
| 第九課 鵝生金蛋 | 4. 鵝生金蛋 |
| 第十課 狗影誤真 | 5. 犬影 |
| 第十一課 獅驢爭氣 | 10. 獅驢爭氣 |
| 第十二課 農夫救蛇 | 9. 農夫救蛇 |
| 第十三課 驢穿獅皮 | 13. 驢穿獅皮 |
| 第十四課 鴉插假毛 | 14. 鴉插假毛 |
| 第十五課 小兒擊蛙 | 20. 孩子打蛤 |
| 第十六課 蜂針人熊 | 22. 蜂針人熊 |
| 第十七課 洗染布業 | 29. 洗染布各業 |
| 第十八課 犬牛爭草 | |
| 第十九課 毒蛇咬銼 | 48. 毒蛇咬銼 |
| 第二十課 病鹿餓死 | |

| | |
|------------|-----------|
| 第二十一課 斧頭求柄 | 60. 斧頭求柄 |
| 第二十二課 鹿入獅穴 | 52. 鹿入獅穴 |
| 第二十三課 車夫求佛 | 56. 車夫求佛 |
| 第二十四課 狼計不行 | 62. 狼計不行 |
| 第二十五課 田主貪心 | 69. 業主貪心 |
| 第二十六課 老蟹訓子 | 80. 老蟹訓子 |
| 第二十七課 獅熊爭食 | 3. 獅熊爭食 |
| 第二十八課 龜兔賭快 | 16. 龜兔 |
| 第二十九課 瓦鐵同行 | 30. 瓦鐵缸同行 |
| 第三十課 大山懷孕 | 39. 大山懷孕 |
| 第三十一課 雞抱蛇蛋 | 43. 雞抱蛇蛋 |
| 第三十二課 杯水救魚 | |
| 第三十三課 貪魚吞餌 | |
| 第三十四課 烏鴉洗羽 | |
| 第三十五課 騾驢過溪 | |
| 第三十六課 狐鶴請酒 | 55. 狐鶴相交 |
| 第三十七課 義犬吠盜 | 57. 義犬吠盜 |
| 第三十八課 荒唐受駁 | 71. 荒唐受駁 |
| 第三十九課 狼誣羊罪 | 1. 豺烹羊 |
| 第四十課 狼靛求醫 | 7. 豺求白鶴 |
| 第四十一課 龜學鷹飛 | 15. 鷹龜 |
| 第四十二課 母狗借窩 | 18. 黑白狗嶋 |
| 第四十三課 蝦蟆羨牛 | 21. 蛤嶋水牛 |
| 第四十四課 獵戶逐兔 | 25. 獵戶逐兔 |
| 第四十五課 愚夫求財 | 33. 愚夫求財 |
| 第四十六課 老人悔老 | 34. 老人悔死 |
| 第四十七課 齊人難為 | 35. 齊人妻妾 |
| 第四十八課 雁鶴同羣 | 36. 雁鶴同網 |
| 第四十九課 戰馬欺驢 | 41. 戰馬欺驢 |
| 第五十課 鼓手誅心 | 44. 鼓手辯理 |
| 第五十一課 驢犬爭妒 | 45. 驢犬妒寵 |
| 第五十二課 蜂狗勸孩 | |
| 第五十三課 船童捉虎 | |
| 第五十四課 兩犬偕行 | |
| 第五十五課 鹿入牛棚 | 51. 鹿求牛救 |
| 第五十六課 農夫遺訓 | 54. 農夫遺訓 |
| 第五十七課 驢馬同途 | 59. 驢馬同途 |
| 第五十八課 愚夫癡愛 | 64. 愚夫癡愛 |
| 第五十九課 縱子自害 | 66. 縱子自害 |
| 第六十課 空言無益 | |
| 第六十一課 鴉欺羊善 | 68. 鴉欺羊善 |
| 第六十二課 杉葦剛柔 | 70. 杉葦剛柔 |

| | |
|------------|-----------|
| 第六十三課 星土被劫 | 78. 星者自悞 |
| 第六十四課 三獸爭羊 | 6. 獅驢同獵 |
| 第六十五課 狼受犬騙 | 12. 狼受犬騙 |
| 第六十六課 四肢反叛 | 26. 四肢反叛 |
| 第六十七課 狐騙鴉食 | 27. 鴉狐 |
| 第六十八課 裁縫戲法 | 28. 裁縫戲法 |
| 第六十九課 眇鹿失計 | 32. 眇鹿失計 |
| 第七十課 鴉效鷹能 | 37. 鴉效鷹能 |
| 第七十一課 束木遺囑 | 38. 束木譬喻 |
| 第七十二課 鹿照己影 | 42. 鹿照水 |
| 第七十三課 羊與狼盟 | 49. 羊與狼盟 |
| 第七十四課 遊戲無味 | |
| 第七十五課 驕者比亡 | |
| 第七十六課 日風相賭 | 53. 日風相賭 |
| 第七十七課 鳥魚連盟 | 58. 鳥悞靠魚 |
| 第七十八課 狼斷羊案 | 63. 狼斷羊案 |
| 第七十九課 馴犬野狼 | 61. 馴犬野狼 |
| 第八十課 鄉鼠遊京 | 8. 二鼠 |
| 第八十一課 獅蚊比藝 | 11. 獅蚊比藝 |
| 第八十二課 馬報鹿仇 | 23. 馬思報鹿仇 |
| 第八十三課 狐誘山羊 | 31. 狐與山羊 |
| 第八十四課 獵主責犬 | 40. 獵主責犬 |
| 第八十五課 指頭弄巧 | 67. 指頭露奸 |
| 第八十六課 術士投河 | 72. 意拾勸世 |
| 第八十七課 神賣己像 | 81 真神見像 |
| 第八十八課 鳥獸同居 | 22. 鷹貓豬同居 |
| 第八十九課 鷓鴣遷家 | |
| 第九十課 父子扛驢 | |
| 第九十一課 鼠知報恩 | 46. 報恩鼠 |
| 第九十二課 鼠繫貓鈴 | 77. 鼠妨貓害 |
| 第九十三課 狐騙猴王 | 74. 猴君狐臣 |

表1が示しているのよう、『読書楽』の「喩言」には93の寓話が収録されている。そのうちの80編は、『意拾喩言』にも同じ話が出ているため、漢訳イソップ物語であることが確認できる。

また、80話のうち、38話のタイトルは『意拾喩言』の寓話のタイトルと一致している。残りの42話のタイトルが多かれ少なかれ異っている。『意拾喩言』の見出しと比較すると、以下の特徴がある。

①四文字の見出し

『意拾喩言』の見出しの文字数は固定されておらず、二文字の見出しと三文字の見出し、さ

らに四文字見出しが多く見られる。それに対し、『読書楽』の見出しは全部4文字になっている。たとえば『意拾喩言』では「鶏鬪」、「犬影」、「亀兎」、「鹿照水」などであったが、『読書楽』では「兩鶏相鬪」、「犬影誤真」、「亀兎賭速」、「鹿照己影」とそれぞれなっている。二文字と三文字の見出しに比べて、四字の見出しは画一的で、リズムもついて、朗々と読める。これは小学校の読本の要求と需要に合っていると推測できる。

②タイトルにストーリーが入っていること

『意拾喩言』の見出しに比べて、『読書楽』における寓話の見出しはストーリーの要約に偏っている。たとえば『意拾喩言』における第5話の「犬影」に対して、『読書楽』は「犬影誤真」と名づけられている。タイトルは、物語の主人公が犬と影であることを示すと同時に、ストーリーの「誤真」が入っている。また第16話「亀兎」は、「亀兎賭速」となっており、主人公が亀と兎であることを明かしつつも、「賭速」であることを示唆している。同様に、第27課の「鴉狐」、第六十七課の「狐騙鴉食」、第8話の「二鼠」、第八十課の「郷鼠遊京」もその通りである。

③通し番号の設定

目次から分かるように、『読書楽』におけるイソップ物語の通し番号は『意拾喩言』の通り番号と異っている。一方『読書楽』の第1課から第93課までの寓話の長さや難しさを見ると、だんだん長くなり、難しくなっている傾向が見られるため、その通し番号の設定は鍾天緯の新式教育による教育理念に符合するものかもしれない。そのような点で、『読書楽』のイソップ物語の順序は、編者が再構成した結果である可能性が高い。すなわち、編者の鍾天緯がこれらの寓話を選ぶ際に、寓話の難しさと優先順位を考慮したということである。

さらに、内容から『読書楽』と『意拾喩言』の異同について考察していく。

前述したように、『読書楽』と『意拾喩言』の関係を分析した結果、『読書楽』におけるイソップ寓話は『意拾喩言』から直接か間接的に参照していると結論付けた。しかし『読書楽』の表紙にあるように、本書は三等学堂訳編である。ここの「訳編」というのは、本当の意味での翻訳ではないが、『意拾喩言』に比べると、その内容にも独自の特徴が見られる。

①中国化された冒頭の削除

『意拾喩言』は、「盤古初」、「禹疎九河時」、「無稽山下」など中国化された冒頭で始まるが、『読書楽』では編集者が意図的にこのような冒頭を削除したようである。それにより、『読書楽』では、『意拾喩言』におけるこのような中国化された冒頭で始まった寓話14編のうち10編の冒頭が削除された。しかし、第二十七課の冒頭における「山海経」、第四十四課の冒頭における「峨眉山」、第六十五課の冒頭における「羅浮山下」、第八十二課の冒頭における「靈台山」が抜けたように削除されなかった。これはまさに『読書楽』が『意拾喩言』を参考にした有力な証拠である。つまり、『読書楽』で削除されなかった数少ないその中国化の冒頭かから、『読書楽』は『意

拾喩言』を参考にしたのが事実であることが分かった。一方、削除された冒頭は偶然ではなく、意図的に削除されたのだろう。

何故かという、理由は主に二つがある。まず鍾天緯は西洋知識を尊び、新式の教育を推奨し、維新変法の助力者の一人であるが、『意拾喩言』における中国風の始まりは元々ロバート・トームが古文を真似してわざと中国的な雰囲気を作り出すために設定されたものである。それは維新変法の理念に逆行するだけに、鍾天緯がそれを削除したの理解できるだろう。

また、このような中国風の冒頭は、中国的な雰囲気を作り出すために設定されたものであり、物語そのものとの関連は大きくなく、イソップ物語の原文とも合わないのである。教科書の厳しさを考慮して削除したのかもしれない。この厳密さについては、第六十六課の「四肢反逆」の訓言で検証されている。『意拾喩言』における「四肢反逆」の訓言は「書云、無君子莫治野人、無野人莫養君子」であるが、『読書楽』では、「孟子云：無君子莫治野人、無野人莫養君子」と厳密に修正されている。このように、鍾天緯教科書の内容に対する厳密さが分かる。

②主人公の変化

冒頭の変化に加え、主人公の変化も特徴の一つである。このような変化には主に2種類がある。一つは、タイトルも主人公も両方変わった例である。例えば、『読書楽』第8課の「鰕鱸俱亡」は『意拾喩言』の79話「鰕鱸皆亡」における「鰕」と「鱸」を「鰕」「鱸」に変えたと同時に、主人公の関係も変わった。『意拾喩言』の「鰕鱸皆亡」では、「鰕為鱸魚之賊、毎見鱸魚便追而啗之。」と記される。つまり、「鰕」は「鱸」の敵であり、「鱸」を見るたびに追いかけて食べることになる。それに対し、『読書楽』では「鱸乃鰕之賊、見鰕則擒而食之」と書いて、「鱸」は「鰕」の敵であり、「鰕」を見るたびに追いかけて食べることになる。また『読書楽』における第六十四課の「三獸爭羊」は『意拾喩言』における第6話「獅驢同獵」の主人公である「獅驢」を「獅虎狼」という三獸に変えた。2つ目は、タイトルは変わらないが、主人公は変わった場合である。たとえば、『読書楽』第十六課の「蜂針人熊」は、主人公がタイトルのとおり「人熊」であるが、内容ではオランウータンになった。また第五十八課の「愚夫痴愛」も同様にタイトルが変わらず、内容では主人公を「書痴家」に変更している。このような明らかな間違いは、教科書を編集する際に出てきたミスのだろう。

③ストーリーの省略と補足・修正

内容から見れば、『読本楽』は、『意拾喩言』を直接引用するのではなく、小学校の教科書の特性と要求に応じて省略したり拡充したりする一方、『意拾喩言』のストーリーに間違いがあった箇所を修正した訳本である。

例えば、『読本楽』第二十八課の「龜兔賭快」では、文章の冒頭における物語の背景や主人公のイメージ及び会話などの内容を削除し、ストーリーをより簡単に、わかりやすくしている。それに対し、第九十課の「鼠知報恩」では、逆に『意拾喩言』の原文に基づいて物語を充実した。

しかも、このような削った場合は本の前に、内容が増えた場合はほぼ本の後ろになることが多い。これは生徒の識字能力による調整であることと推測できる。

それだけでなく、寓話の内容もいくつかの修正がある。

例えば第5課の「雞鶉同飼」では、『意拾喩言』の「雞鶉同飼」における「家畜雄雞」を「養鶏一群」に変え、後の「又見兩雞相關」に下地を作った。また『意拾喩言』の第6話は「獅驢同獵」であり、それはライオンとロバが同時に一匹の羊を捉え、分配の問題について議論をする話である。しかし鍾天緯はロバは草食性の働物であり、ライオンと肉を奪い合うのはストーリー的にも論理的にも無理なところがあるため、「獅虎狼」という三獣になった。なお、第五十八課の「驢馬馬同途」は、馬が「日行千里」という表現を削除している。編集者の鍾天緯は物語の論理性に厳しい要求を持っているようである。

④訓言の変化

『読書楽』と『意拾喩言』の大きな違いは、訓言の変化である。『意拾喩言』に比べて、訓言を変った物語は20編に達する。削除、補足、修正、そして直接入れ替えなどいろいろな修正があります。『意拾喩言』における物語の訓言にある「俗云」に関わる内容は、原書の翻訳者であるロバート・トームが自ら加えた評語であるため、鍾天緯がその一部を要約することには完全に同意できないようである。

表4 『読書楽』訓言の変化に関する表

| 削除 | 補充 | 修正 | 変更 |
|------------|------------|------------|------------|
| 第二十五課 田主貪心 | 第十三課 驢穿獅皮 | 第四課 狐罵葡萄 | 第四十二課 母狗借窩 |
| 第四十四課 獵戸逐兔 | 第四十一課 龜學鷹飛 | 第十四課 鴉插假毛 | 第四十三課 蝦蟆羨牛 |
| 第六十三課 星士被劫 | 第六十二課 杉葦剛柔 | 第十五課 小兒擊蛙 | 第五十八課 愚夫癡愛 |
| 第七十八課 狼斷羊案 | 第六十六課 四肢反叛 | 第十七課 洗染布業 | 第八十一課 獅蚊比藝 |
| 第八十三課 狐誘山羊 | 第六十八課 裁縫戲法 | 第二十一課 斧頭求柄 | 第八十七課 神賣己像 |
| 第九十三課 狐騙猴王 | | 第四十五課 愚夫求財 | |
| | | 第四十八課 雁鶴同羣 | |

⑤言葉の通俗化及び白話への傾向

『読書楽』は伝統的なテキストとは異なり、内容、言語、形式などの面で明らかな「新学」の特徴を呈している。その特徴の一つが通俗化である。このような現象は寓話にもよく現われている。たとえば『意拾喩言』第27話「鴉狐」では、狐がカラスを褒めるふりをしている際は「聞先生有霓裳羽衣之妙，特來聆聽一曲」のような古文で表現している。それに対し、『読書楽』第六十七課の「狐騙鴉食」には、「先生唱曲甚佳」とある。二つを比較すれば、通俗化は一目瞭然

である。また、第三十八課の「荒唐受駁」は、訓言をそのまま白話に置き換えていることが見られる。鍾天緯は『意拾喻言』の「文白混合体」を土台に、さらに話を通俗化した。このような白話傾向は『読書楽』の中から多く見られることから、それは小学校の教科書に対する編者の通俗化の改造であろう。

(四) 『読書楽』の影響

『読書楽』におけるイソップ物語の影響については、『読書楽』自体の広がりや受容状況に関わるものだけ考えられる。つまり『読書楽』の読者数、普及の深さと広さなどの面から考察できる。

上海三等公学堂は存在期間が長くないが、毎年蒙館と経館の学生が数十人ずつおり、その学生の数はかなりのものである。また、三等公学校では、授業が終わるたびに、すぐに復唱させている。各館20人がいるから、1人が復唱すると、10数人が復習することができる。二回復唱させていると、四十回ずつ同じ内容復習することになる。このような教育方法で、学生は寓話に対する理解も非常に深くなるつつだろう。従来の漢訳イソップ訳本の多くはただ読むだけであったが、これほどイソップ物語を真面目に勉強したのは初めてである。このような特殊な教育方法の下で、寓話の影響と普及をさらに深めた。また、三等学堂の新式教育が実施されたとたん、多くの私塾では様子見の姿勢を取ったが、後に効果が顕著になり、真似をするようになった。その影響は三等学堂に限らないことが想像できるのだろう。

以上述べたように、『読書楽』における漢訳イソップ寓話は、当時の新式教育と呼ばれる教育の特徴を持っている教科書化されたイソップ寓話である。これは鍾天緯が新式教育の面で将来性の探索と実践を付け加えたものである。時間の不足のため、教科書における間違いやまだ足りない点も明らかである。しかし、これらの不足は、彼の中国の小学校教育における顕著な貢献と、漢訳イソップ物語の伝播に対する積極的な影響を消すことはできない。